

# 教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,  
Città del Vaticanoの転載許可済  
©1989  
発行所  
財団法人 精道教育促進協会  
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6  
☎(0797)31-3452

## 正しい心

### イエズス・キリストとの一致のもと

1 「神なる主のおきてを守れ：それを守ってふみ行え。そうすれば民の目の前でおまえたちの才知と聡明を示すことができる。」(第二法の書4・2、6)

生活には法があり、キリスト信者の生活も厳しく徹底した生活を要求する規定に従っています。それが神の掟で、イエズス・キリストの内に完全に履行されていることがわかります。イエズス・キリストは私たちキリスト信者にとって生きる模範です。なぜなら、神の生命はキリストの死と復活の功徳を通して私たちに豊かに伝えられたからです。イエズスは絶えず恩寵を与えることにおいて、常に私たちの人生に現存され、私たちと共に歩まれます。

日曜日のミサではいつも復活祭と洗礼の思い出に立ち戻らせ、私たちの生命がキリストに接ぎ木されている

ることを思い出させます。私たちの内にある罪に汚れた昔のアダムはキリストにおいて死去し、新しい生命に蘇るため、新しいアダム、つまり復活された御方に私たちは接ぎ木されるのです。イエズスから新しい生活液が流れ出すと同時に、新しい生活の基準が示されます。「神なる主のおきてを守れ。——この法の規範であり土台であるイエズスを、絶えず見つめていてください。イエズスは私たちの導き手です。キリストの内

### 忠実に正しく守る

2 神の御言葉からくる厳しいけれども希望に満ちた戒めに注目しましょう。

福音書は、「人間の伝えにしがみつくとために(マルコ7・8参照) 神の戒めを無視することなく、主の戒めを忠実に正しく遵守せよと呼びかけています。イエズスの厳しい非難は「口先で私を敬うが、その心は遠くにある」(マルコ7・7参照)人々に向けられています。主は私たちに良心の真理と誠意をもって神の法に忠実であるよう求めています。同時に法を確実に遵守することについての奪うことのできないまことの源泉がどこにあるかをも示してください。

それは一人ひとりの心の中なのです。倫理悪の根源、法の不履行や拒絶の根源は心の中に巣を作ります。「悪い考えは内から、人の心から出る。」(マルコ7・21) 同様に善い決心、善への欲求、高潔な良心の決然とした約束も心から出ます。善い心、誠実で真実な心で働くことが必要です。善い心こそキリストと私たちが一致するための基礎です。

### 3

キリスト信者の生活はキリストを通して神に受け入れられ、頭を中心にして統一された多数のメンバーの生活になるのです。ですから、私たちの心はキリストの聖心に従わ

なければなりません。キリストは、神がユニークで決定的な方法で御自分を啓示されることの核であり中心なのです。キリストは父なる神の決定的な真理です。肢体はキリストから力を受け、愛において自らを作り上げるように成長するのです。(エフエゾ4・18参照) 従ってキリスト信者は誰でも導きの真理、方角を定める光、養ってくれる恩寵を神のみことば・イエズスの内に捜さなければなりません。

こうすれば希望は私たちの全ての努力を支えてくれるでしょう。この方法とこの生命の計画に忠実であることこそ、「変わることなく変化の影

さえもない光の父から、上から下る」完全な贈り物(ヤコボ1・17)であると理解できるからです。

4 「あなたたちの内に植えられていて靈魂を救う力のあるみことばを素直に受け入れよ。(ヤコボ1・21) 私たちが清らかな良心をもって御言葉を受け入れ、まことの回心をするよう主は強く要求なさいます。実際、受け入れるとは御言葉を私たち自身のものにする、御言葉からくる光に良心を開いて従い、御言葉が私たちの自由という領域に入ってくるよう振舞うことを意味します。

不幸にも人間は自己弁護したい誘



惑にそそのかされると、ひどい歪みにも屈服する場合があります。よく知られていますが、習慣や形式的儀礼に従うことで満足しているキリスト信者と化すことも、福音という黄金のルールから人々を遠ざける行動の中心や見本に自分なるうとずる傾向もあり得ます。人間の心は、神の御旨に対する反抗が原因となる「悪い考え」(マルコ7・21)にも「人間の伝え」(同7・8参照)にも汚されるのです。

使徒ヤコボは「みことばを行なうように努めよ。そうしなければ自分を欺くのである」(ヤコボ1・22)と言っています。素直な穏やかな心で絶えず清めを求めへりくだった望みを抱いて御言葉を実行することに専心従事し、自らを欺くようなことにならぬよう神にお願いしたいと思えます。

神のたてた計画をことごとく受け入れて最初の信じる者となった処女マリアの生涯の模範が、私たちの役に立ちます。一生を通じて御子との一致を十字架の下までも着実に保ち続け、信仰の巡礼において私たちに先立って歩まれたマリアが、主の掟を守る私たちの生活の模範となってくださいますように。御取次ぎによって私たちが助けてくださいますように。人となられたみことばを心に受け入れたマリアは、新しい人類の「心」となられたのですから。主の掟を守り、私たちの全存在をあげて主を愛することが出来ますように。私たちの心を純潔に、誠実に、幸福に、強力にしてくださいませよう。マリアにお願い致します。アーメン。



本日は、聖霊の賜の二つ目、聡明について考えようと思えます。信仰とは、明暗両面を有する秘義を受け入れて忠実に神に従うことであると知っています。しかし、それはまた、啓示された真理をよりいっそう深く知りたいたい望み、探求を続けることでもあります。ところでこの望みを駆り立てるのは聖霊の内的な働きの結果です。聖霊は、信仰と共に、この知性の特別の賜、いわば、神の真理を洞察する力をお与えになります。

## 聡明の賜

インテレクト (Intellect - 知性) という言葉は、ラテン語のイントゥス・レジェレ (intus legere -

### 【病者の塗油】



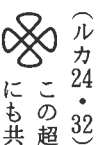
# 苦しみの秘義



苦しみは私たちをそのかしの神の王国に近いというイエズスの言葉を疑わせます。苦痛が理性を鈍くし、体と靈魂を圧迫する時、神は遙か彼方に見え、人生は重荷となり得ます。福音を信じたくなくなり、知恵の書にあるように「この朽ちる肉体は、靈魂の重荷となり、この俗世の天幕は、数多い心配にふさがれている精神を押しつけます」(知恵9・15)

中を読む) から派生したもので、洞察する、完全に理解するという意味を持っていきます。「神の深みまですべてを見通す」(コリント①2・10) 聖霊は、このような洞察力を信者に与え、神の御計画を理解できるように、その心を開いてくださいます。エマ

苦しみの秘義は病人を圧倒し、心の動揺をきたす新たな疑問を投げかけます。なぜ神は私を苦しませておられるのだろうか。苦しみは一体何の役に立つのだろうか。善にて在らず神がこのような悪が起るのを放っておかれるのだろうか。重荷を負った理性と心が尋ねるこのような問に答えるのは容易ではありません。(信仰の光) がなければ満足はいく答えを見つけられるはずがないのです。



(ルカ24・32) この超自然的な洞察力は個人にも共同体にも与えられます。使徒たちの後継者であり、キリストの特別の約束の相続人である(ヨハネ14・26、16・13参照) 牧者にも、また聖霊の塗油(ヨハネ①2・20、27参照) のお蔭で、具体的な選択をすべき時に導きとなる特別の信仰感覚 (sensus fidei) を有する信者にも与えられるのです。

知恵の書にあるように、われらの御父にして創造主なる神に声高く叫ばなければなりません。「知恵はあなたとともにあり、その働きを知っています。(…)聖なる天から知恵を送りたまえ。(…)それがわたわらにいて、私とともに働きますように」(知恵9・9-10)

面だけでなく、現在と未来を預言的に洞察すること、つまり時のしるし、神のしるしを読み取ることが出来るのです。皆さん、典礼の言葉を使って聖霊に祈りましょう。「聖霊よ、来たまえ、天より、御光の輝きを送りたまえ」(続唱) 全能の御方がなさったもろもろの秘義(ルカ2・19、51参照)の深い意味を聖霊の光のもとで絶えず読み取ることができた、いと聖なるマリヤ、耳を傾けて聴き入る聖母を通して聖霊にお願いしましょう。神のすばらしい御業を眺めることは、深い喜びの源でもあります。「私の魂は主をあがめ、私の精神は、救い主である神により喜びおどります」(ルカ1・46以下) (八九・四・一六)

いるとしても(病氣は個人の罪に対して神が与えられる罰ではないのは確か)であるということをも明白にさせます。この人が盲目で生まれたのは誰の罪ですか、と尋ねられた時は、イエズスは「この人の罪でも親の罪でもない、ただこの人によって神の御業を現わすためである」(ヨハネ9・3)と答えられました。イエズスに従う人々にとって全く思いがけない朗報でした。苦しみの神の罰ではなく、善い目的のため、神の御業を現わすために意図されているのです。

力を与え、癒すキリストの現存の神の御業を最も雄弁に現わしたのが(キリストの受難と死)です。イエズスは超越の秘義によって救いを勝

御案内 『拓』 エスクリバー 著 本体価格一六〇〇円 千三二〇円 『信徒の神学と霊性』 デル・ポルティエリ 著 本体価格四〇〇円 千二二〇円

# 説教・講話・書簡等の抄訳

ち取って下さいました。愛をもって受け入れ、神に信頼して捧げれば、苦しみと死は(永遠の勝利の鍵となり、死に対する生命)の勝利、(死を通して)生命の凱旋となります。

特別の秘跡によって教会は病人を愛するイエズスの御業を続けています。病者の塗油は、愛すべき救い主の模範を忠実に守ります。

この秘跡は、病人に対する教会の全面的な関心と結びつけるとよく理解できます。なぜなら、この秘跡は家庭に、病院に、その他の所にいる病人に対する種々様々な司牧的努力の頂点にあるからです。教会のメンバー全員が係わる愛すべき奉仕プログラム全体の頂点です。

私たちは、イエズスの模範とヤコボの教えとに忠実に従っています。「病気の人がいるなら、その人は教会の長老たちを呼べ。彼らは主の名によって油をぬって祈りをとなえる。そして信仰による祈りは病気の人を救う。主は彼を立たせ、もし罪を犯しているなら、それをゆるされるであろう。」(ヤコボ5・14-15)

教会がキリストの制定になる新約の七秘跡の一つであると教える病者の塗油の伝統を、今日ペトロの後継者が受け継いでいます。

私たち全員にとって、かなり年配の人々や病人にとってさえも健康とは当然のことではなく、神の祝福であることを思い出すべきでしょう。健康とはアルコールや麻薬の濫用とか、その他のどんな方法によっても危険にさらしてはならないものです。パウロも言っています。「あなたたちの体は…聖霊の聖所である…と

を知らないのか。…だからその体をもって神に光栄を帰せよ。」(コリント①6・19・20)

自分の健康を守るために必要な努力を払うなら、人に奉仕し、この世での責任を果たすことができます。けれども、病弱にかかったなら、弱った私たちを助け、力を与え、癒してください。キリストの現存をもたらすこの特別な秘跡を受けるのです。

病気が重い人々は、(キリストと教会)の助けがほしいと深く感じます。肉体的な苦痛と衰弱に加え、病気が強い(不安と心配をもたらします。病人は今まで出会ったことのない誘惑に傷つき易く、絶望の一步手前まで行くこともあるでしょう。病者の塗油は、まさにその必要に応えるものです。これは信仰の秘跡であり、全人格、体と靈魂のための秘跡だからです。

司祭が両手で按手し、油を塗り、祈ると新たな恩寵が与えられます。「この秘跡は、病人に聖霊の恵みを与えて、救いに関連して人間全体を助け、神への信頼を深めさせ、悪霊の誘惑と死の恐怖に対して抵抗力を強め、また病苦に耐えるだけでなく、これと戦う力を与え、さらに霊的な救いに役立つ場合は、からだの健康を回復させる。」(カトリック儀式書、病者の塗油)解説二)

病者の塗油は(死の間近な人々に独特の慰めと恩寵)をもたらします。この秘跡は、地上での生命の最終に直面している病人に、復活された救い主に対する生き生きとした信仰と、復活へのしっかりした希望を用意します。同時に覚えておかねばならないのは、この秘跡が死に瀕している人々のためばかりではなく、病弱や老齢のために死の危険にさらされて

いる人々のためでもあるということ。死が私たち全員を訪れることは避けられませんが、この秘跡の目的は死の準備だけではありません。病気の時の私たちを強くすることもその目的なのです。ですから臨終まで待つことなく秘跡を願ひ、その恩寵を乞い求めるよう、教会は病人や老人を励ましています。

主は善き牧者で私たちを静かな水際に導き、しおれた魂を再び生き生きとさせてください。詩篇は歌っています。「あなたに敵の前で、私に食事を調べ、油を注いで私の頭を匂わせ、そして私の杯はあふれる。」(詩篇22④・5)

油を注ぐとは癒しを表わすのに使われるのが常でしたが、神の民の前では特別な使命を表わすものでもありました。聖書の中では神が重大な使命のために選ばれた人々が特別

の塗油を受けているのを度々見かけます。同じことが病弱や老齢の皆さんにも起こるのです。皆さんは(教会で重要な役割)を持っています。皆さんが感じている(弱さ)そのもの、特に(その弱さを受け入れる愛と信仰)を見ると、本当に重要な事、人生におけるさらに価値ある世界の存在に気づきます。さらに皆さんがその苦しみを(キリストと一致して捧げる)と、苦しみは特別な価値、創造的性格を持つのです。苦しみは贖いの秘義に与って贖う力をもつようになるのです。だからこそパウロは次のように言えたのです。「私は今あなたたちのために受けた苦しみを喜び、キリストの体である教会のために、私の体をもってキリストの苦しみの欠けた所を満たそうとする。」(コロサイ1・24)

(八八年十二月)



「われは天地の創造主、全能の父なる唯一の神を信ず。神の途方もない豊かさをこの使徒信経の第一条に完全に納めることはできません。実際、世界——目に見えるもの見えないもの全て——の創造主としての神を信じることは、聖なる摂理の啓示と有機的につながっています。創造の御業について考えを深めつ

## 摂理への信仰は希望のみなもと

### 摂理シリーズ

①



つかテケージスを始めましょう。テーマはキリスト教の信仰と信仰に招かれていた人の核心に触れるもので、それは神の摂理についてです。賢明かつ全能の父としてこの世に、そして全ての被造物の歴史の中に現存し活動しておられる神についてなのです。神の現存によって被造物、とりわけ神の似姿として造られた人間は

「ああ、彼に至る道が私にわかり、彼の住居に至れたなら、私はその御前で訴え、この口で盛んに弁論す

真理と愛に導かれ、永遠の生命という目的地に向かう旅である自己の人生を生きていくことができるのです。

伝統的なカトリック要理は「なぜ神は人間を造られたのか」と問いかけます。教会の大きいなる信仰に鼓舞された私たちが次のように繰り返します。「この世で神を知り、神を愛し、後の世では永遠に主と共に幸福に過ごすことができるよう、神は私たちに造られた」と。

しかし、冷静・着実に人類の歴史を導く神についてのこの素晴らしい真理にも拘わらず、人間の心には二つの相容れない感情があります。一方は摂理の神を受け入れ自らを神に委ねるよう導かれています。詩篇が

歌うように、「私は魂をしずめ、柔らげた、母から乳離れした子のように」(詩篇130・2)と。他方は物事に惑わされて創造主を忘れるのか、苦しみによって父なる神を疑うのか、生命の主であり救い主である神に自らを委ねることを恐れためらっています。神の摂理に疑問を投げかけます。人間とはそのようなものです。聖書にもヨブが信頼の心で率直に神に不平を述べる場面があります。神の摂理が神の子らの愚痴の中にさえ示されることを、神の言葉は指摘しています。苦しみの中でヨブは言います。「ああ、彼に至る道が私にわかり、彼の住居に至れたなら、私はその御前で訴え、この口で盛んに弁論す

# 不変の教え



るだろう(ヨブ23・3〜4)と。  
哲学者の考察や、偉大な宗教の教えの中、あるいは市井の男女のささいな考えの中に、人間の歴史全体を通してこの世における神の御業を何とか理解したいというより、その正当性を示したいと考えてきたことが読み取れます。

その点について多様な考えがありますが、完全無欠な答えもなければ、全てを認めることもできません。昔から気紛れな運命や宿命に答えを求めた人々はいました。神を肯定しながらも、人間の自由意志を危険にさらした人々のことです。また現代は、人間と人間の自由を認めれば神を否認することになると考える人々がい

ます。これらは極端で一方的な考えではありませんが、少なくとも私たちが「神の摂理」と言う時、人生に関わる大きくて深い問題が前面に出てくることを示しています。どのようにして神の全能と私たちの自由とを調和させるのか? 私たちの自由は、決して誤ることのない神の聖旨とどのように調和されるのか? 私たちの将来はどうなるのか? この世の数の悪、つまり罪という道徳的な悪や罪無き人々の苦しみに直面した時、神の無限の知恵と善とをどのように解釈し理解するのか? 幾多の出来事、恐ろしい異変の数々、そしてまた偉大な、崇高な、神聖な行為の数々を何世紀にも渡って繰り広げるこの私たちの歴史……これらはみななどい

う意味をもっているのだろうか? 全生命を永遠に葬り去るような最後の大変動がないならばそれは決して到着点を見出すことなく、全てのものが出発点へと永遠かつ宿命的に戻ってくるという意味なのだろうか? あるいは反対に、(ここで心は他のどんな理屈が与える理由よりも、遙かに優れた幾つもの理由があるのだと感じている)全てを知っている確実な存在、私たちが神と呼ぶ御方が在すという意味ではないだろうか?



希望と絶望との狭間にあって危機に瀕している現在、私たちの希望の根拠を神の言葉が揺るぎないものとしてくださいます。信じられないほど素晴らしい神の言葉、何度聞かされてもお祈しい神の言葉なのです。言葉とは人間がこの上もなく大きな要求を突きつけた時に一層の偉大さと魅力を帯びるものです。神はここに在す。彼はエンマヌエル、私たちが共に在す神なのです。(イザヤ7・4)そして、死者の中から復活したナザレトのイエズス、神の御子にして私たちの兄弟であるイエズスの内に、神が「私たちのうちに住まれた」(ヨハネ1・14)ことを示されます。教会はいつもキリストという模範と聖霊の力によって導かれ、神の現存のしるしを絶え間なく熱心に捜し求め、調べ、提示し続けてきたと言えましょう。それゆえ教会は恩寵と神の摂理の意味するところを世界に宣言し、示さなければならぬのです。摂理は人間を愛するがゆ

えに、不可解な事物の重圧に押し潰されそうなる人間を救い、偉大で計り知れない愛の秘義に委ねることができるとです。そこでキリスト教は素朴な言葉でこれを表わします。今日に至るまでキリスト教信仰と文化の遺産を担う言葉です。「神は見給う」「神は知り給う」「神は欲し給う」「神の御前に生きること」「聖旨の行われんことを」「神は曲線でも真っ直にお描きになる」……要するに神の摂理であります。



教会が神の摂理を告げるのは神が自ら摂理の神として御自身をお示しになったからです。それは神の創造と救いの御業は分けることができなほど一体化しており、両方が共に永遠の昔から定められていた唯一の計画を構成している、と啓示なさった時のことでした。聖書全体が神の摂理に関する最高の文書となったのです。聖書によると創造という形で神は自然に介入し、さらに素晴らしいことには、贖いの御業を通して、私たちがキリストにおける神の愛によって更新された世界に住む新しい被造物となることができるようになってくださいました。事実聖書は創造に関する章や、救いの御業を記す数々の章で神の摂理について語っています。つまり、創世の書や預言書の中でも特にイザヤの書、詩篇の創造の部分の中、また歴史の中で働く不思議な神の計画(エフェソ人、コロサイ人への手紙参照)についてのパウロの深遠な黙想の中、この世に現われた神のしるしを鋭く見つけ出す知恵の書、神のうちにこの世の意味を見つけ出すとされる黙示

録など。結局明らかになるのはキリスト教の言う神の摂理が決して宗教哲学の単なる一章ではないということ、信仰とはヨブやヨブのような多くの人々の重大な問題の数々に答えを与えてくれるものだということ、神学的に堅固で確かな事柄に基づいて理性そのもの、理性の教訓を認めつつ十分に広い視野から答えを与えています。



真剣な問いに対しては真面目で十分理にかなった答えが与えられるべきです。そこで私たちが一つのテーマの様々な面に触れようと思えます。特に神の摂理がどのようにして創造という大事業を動かすのか、また多様で現実性にあふれた神の御業を如実に示す表現について考えたいと思います。こうして摂理は卓越した知恵として人間を愛し、神の愛情のこもった配慮の第一の受け入れ手として、神の知恵を備えた協力者として神の計画に加わるよう呼んでおられることが明らかになります。対立ではなく愛の交わりをなしています。啓示、とりわけキリスト

この点について、私たちは聖伝に基づく信仰に関する考察へと導かれます。その過程においては、永遠の真理の範囲内で摂理について常に、また新しい角度から問い続ける人間の良き伴侶たらんとする教会の助けを借りることができましょう。第一、第二バティカン両公会議はそれぞれに貴重な聖霊の声です。それを黙想し、その深遠さに畏れをなすことなく、そこから生命の泉とも言うべき朽ちることのない永遠の真理を汲み取らねばなりません。

において、私たちの将来の運命という深遠な問題にも摂理の光が与えられています。それは秘義を損なうことなく御父の意向を保証してくれるのです。このように見ると神の摂理は、悪と苦しみが存在する理由から否定されるのではなく、却って私たちの希望の砦となり、悪からさえも善を引き出せることを教えてくれるのです。第二バティカン公会議が明らかにした事実、世界の発展と進歩に対する神の摂理のたいなる役割を思い起こしましょう。また、広がりつつある王国という素晴らしい構想のもとで、全知の神のこの世における絶え間ない賢明な行為の目的に目を向けましょう。「知恵のある者よ、この言葉を悟れ。賢い者よこれを理解せよ。主の道は直く、正しい者がそれを歩み、罪人はそれにつまづく」(ホゼア14・10)

## 「教皇様の声」専用保存ファイル発売中

- 「教皇様の声」が約3年分保存できます。
- ポリプロピレン樹脂製・ブルー、金文字装丁
- 定価750円〈消費税込み価格〉  
(1冊・250円 2冊・360円 3冊以上・600円)  
ご希望の方は、  
〒659 芦屋市船戸町12-6  
(財) 精道教育促進協会「教皇様の声」係まで  
お申し込みください。

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 ■毎月 十日発行 ■定価 一部八十円 送料実費  
 ■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要  
 郵便振替 神戸 3-72393